

- GteX及びALCA-Nextの採択結果等の報告、GX関連領域における産業界等からの話題提供、前回の議論のまとめと事前アンケートの結果紹介を行った後に、総合討論
- 総合討論における主なポイント：
  - GteXでのブレークスルー創出に向けて、具体的な目標設定や、チーム体制を柔軟に見直すマネジメントが必要。
  - 今後取り組む領域の検討に当たっては、俯瞰的な観点や社会科学的な観点を持つことが重要。
  - ボトルネック等について、ニーズ側（産業界）とシーズ側（アカデミア）とのコミュニケーションも重要。

### <GteX事業のマネジメント・プロジェクト運営について>

- カッティングエッジな目標達成を期待したいが、そのようなものは、開始当初には具体的な目標を設定しにくい場合もある。いつまでに具体的な指標をつくるのかも含め、マネジメントを行っていただきたい。
- チャレンジングで新しい技術が出てブレークスルーを生むためには、研究者の層が厚くなる必要がある。場合によっては勇気ある撤退を促すことも重要であり、他方で撤退した研究者が戻れることも必要。また、革新的要素技術開発のように、若手研究者を活かす仕組みも重要。柔軟な制度設計・運用を工夫いただきたい。
- 戦略コーディネーターなどを設置し、俯瞰的に見た上で、領域アドバイザーとも連携しながら具体的な成果につなげていくことも重要。
- 横断的な観点では、まずはGteXを推進する中で、上流と下流での連携（材料に広げる、応用に広げる）、3領域間での連携などから始めるとういのではないか。
- 量産化やハードウェア導入時の枠組み、実際に事業化する際にどのような構成がよいのかなど、研究開発の周辺部分についてもジャパンイニシアチブでリードをとっていただきたい。
- 蓄電池産業が欧米にはないが日本にはあるという点は、日本の強みでもあり、逆に基礎研究にとっては弱みでもある。できるだけこの強みを生かすような方向で研究をしていただきたい。
- サプライチェーンリスクの問題もあるが、全てを日本単独で行うことはなかなか難しいため、同志国との国際連携を戦略的かつ注意深く進めていただきたい。

### <今後取り組むべき研究開発の方向性について>

- 重要な技術がたくさんある中で、俯瞰的に見ることが非常に重要。一步上の立場から見て提言を行うような流れが大きくなるとよい。
- 技術的な観点から見るだけでなく、社会科学的な観点での評価指標も充実させ、どのように環境や産業に影響してくるのかを客観的に評価した上で決めていくというプロセスも必要。
- 日本は研究の幅が広いことが強みであり、例えばIPCCで少しテーマが変わったときに、どんな分野でも対応できた。他方で、注目が集まり各国の取組が進展した際にも、最後までプレゼンスを維持できるようになることが必要。
- アカデミアはGXの苗床になるべきであり、領域を過度に狭め過ぎないことは大事なポイント。産業界のロードマップに対応できるようなものを産省・NEDOで、チャレンジングな取組を行いアカデミアから新しいシーズを創出するところを文科省・JSTで行うと、プロジェクトの価値が社会全体で上がるのではないかと。
- 産業界での取組をさらに進めていくためのボトルネックについて、ニーズ側（産業界）からシーズ側（アカデミア）への情報発信が十分なのか気になる。産業界とのコミュニケーションをどのように行っていくか、有効にニーズを反映させていくことが重要。
- 研究自体の幅を広げることはもちろん、新たな技術の研究開発において需要側がどう使いたいかを把握し、ある程度ニーズが見えてきたところをいかにリーズナブルな価格で出していくかという研究、需要側がどう取り込むかという研究も併せてできると、更に幅が出てくるのではないかと。
- 日本にいい技術がたくさんある中で、それらが競争力を持つためには、製造技術についてアカデミアがどのように協力できるのかについても考慮するとよいのではないかと。